

世界初の刊内寄生紙

発行日：『ふあるせえた』に準ず

編集・発行：吉川二郎

〒666-0129 川西市緑台

7-8-8-203

月刊『ジロリト』

新しい楽器 “ギタルパ” のこと (3)

吉川二郎

今年の10月からぼつぼつと弾きだして、すでに6回のコンサートで聴衆に披露したギタルパ。曲目は16年前の開発当初から弾き続けている日本の名曲「浜辺の歌」と、最近の編曲で、ギターでもよく弾いているコーヒールンパとして有名な「モリエンド・カフェ」の2曲。ゆったりとした「浜辺の歌」は音だけ聞いていると「モリエンド・カフェ」よりも易しそうに聞こえるが、私自身、どちらが難しいかと言えば、浜辺の歌の方がはるかに難しい。

ギタルパはメロディーを弾くだけなら大変易しい楽器で、普通に音階で並んでいる弦を鍵盤ハーモニカのように弾けばいいだけだ。しかしギタルパの面白いところは、音域が広くて、豊かな伴奏も弾け、臨時記号の半音を出すには、その音だけ左手でフレットを押さえるだけでよい。ただ、高い音と低い音を同時に弾くためには、少し右手を広げて、遠い弦を弾かねばならない。「浜辺の歌」は高い

メロディーと同時に低音の伴奏を弾いているため、これらの技術が必要になり、少し訓練を要する。

逆に「モリエンド・カフェ」はテンポが早く難しそうに聞こえるが、離れている音が少なく、音を覚えてそのまま弦をなぞってゆけば簡単に曲が弾けてしまう。弾くことに余裕があるので、メロディーのアドリブ変奏なども難くこなせる。演奏会では野口久子の伴奏をつけ、華やかになって本当に楽しんで弾けていると思う。

ギタルパのキャッチフレーズは「大正琴よりも易しく、ギターよりも難しい」で、大きさはギターの約半分、音域は開放弦だけでギターと同じ3オクターブ半ある。フレットを使えばあと1オクターブ広くなり、小さな体に大きな可能性を秘めている。まさに、気軽に音楽の演奏を楽しめるが、深入りするととてつもなく難しい技術を要求されるようになってくる。

これからは、ギタルパらしい曲のレパートリーを少しずつ広げて、聴い

た人が自分も弾いてみたいと思えるような演奏をしたいと思う。選曲には、「浜辺の歌」のような日本の名曲や世界の愛唱歌を編曲していきたい。すでに候補曲はいくつも上がっているので「乞うご期待！」である。

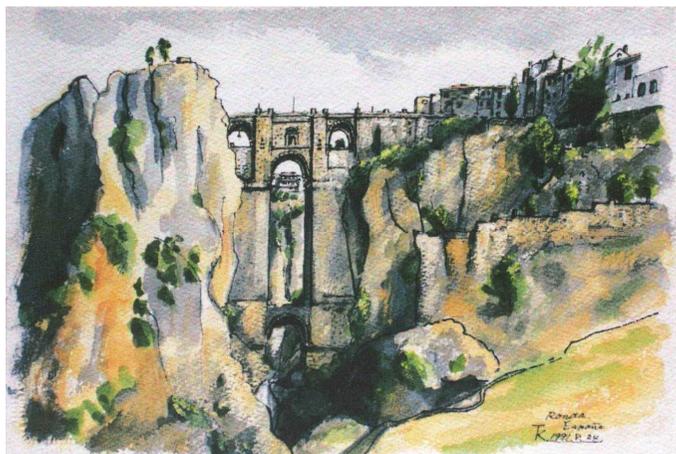
長い間踏みとどまっていたギタルパでの演奏活動をようやく踏み切れたのは、タラセア作家の星野尚氏との出会い、製作を引き受けて下さったギター製作家の宇野充氏との出会いによるところが大きい。お二人には改めて感謝したい。特に星野尚氏は、スペインでは途絶えてしまっている木製象嵌細工のタラセアの技術を守りながら独自の技術を開発し製作に励んでいる唯一の人で、そのタラセアがギタルパに施されている喜びも同時に味わわせて頂いている。



天国に一番近い村(タラセア：星野尚)



星野尚氏・宇野充氏とともに



プエンテ・ヌエボ(スペイン・ロンダ) 鉛筆水彩 金澤孝久画

漬物と鍋物と汁ど大根
聖夜明け宴の余韻二人連れ